日時：２０１９年7月2日（火）１６：３０～１７：３０
場所：総合教育研究棟Ｆ６８０
インタビュアー：本田央人（メディア・表現文化学２年)、鈴木花蓮（メディア・表現文化学２年)、熊谷弘毅（1 年）
インタビュイー：太田美奈子先生（新潟大学人文学部助教）

太田先生の研究内容について

学生：「それでは太田先生、本日はよろしくお願いします。まず初めに、太田先生の研究内容についてお聞かせください。」

太田先生：「はい、よろしくお願いします。私は『地方における初期テレビ受容』をテーマに研究しています。日本でテレビの本放送が始まったのは１９５３年ですが、私の故郷である青森県でテレビの視聴環境が整ったのは6年後の１９５９年でした。その間、青森県の人々はただテレビを待っていたのではなく、他県からのテレビ電波を積極的に受信しようと試み、受信に成功すると、テレビをその地域の文脈で様々にとらえていきました。漁業が盛んな八戸市では、テレビを船の無線通信の延長線上にとらえ、２５０ｋｍ離れた仙台から電波を受信しましたし、『県庁から最も遠い村』と呼ばれた佐井村では、社会を知るための窓としてテレビをとらえ、学校を中心に教育的に受容していきました。フィールドワークを中心とした青森県の調査によって、初期テレビ受容期に立ち現れたテレビ利用の可能性の複数性を明らかにし、これからのテレビについて考えていきたいと思っています。」

北海道放送の試験電波を受信した佐井村の電器店のテレビ

先生のこれまでのご来歴・影響を受けた本など

学生：「では、次に先生のご来歴についてお聞かせください。」

太田先生：「高校卒業までを青森市で過ごしました。上京して、大学では映像文化論のゼミに所属していました。また、大学の授業でイスラームに関心を持ったことから、卒業論文は映画におけるイスラーム表象について書きました。メディアを通して知る世界にばかり心を動かされる自分に対して、高校生の頃から罪悪感のようなものを抱いていたので、自分が直接目にしていない情報に孕む危険を研究したいと思ったのです。大学を卒業した後、大学院の修士課程では文化人類学を学びました。イスラーム表象について、海外から日本へ、文化の翻訳という側面から研究しようと考えました。メディアは映画からテレビに変更しました。テレビに親しんできた私にとって、イスラームというイメージに貢献したメディアはテレビだと思ったからです。
イスラームのステレオタイプを形成する報道番組について分析していくうちに、自分の中に疑問が生まれてきました。どうして私はテレビを否定してばかりいるのかと。勿論、報道におけるステレオタイプの問題は研究されるべきです。しかし、高校生の頃からの問いに接近するためには、もっと違う研究が必要だと思いました。私は、テレビっ子という自覚はありませんでしたが、学校では前日のテレビの話題で盛り上がるような、同世代の平均的なテレビ視聴を経験してきました。テレビによって遠くの世界を眺めたり、心を打たれたり、くだらないバラエティ番組を見て笑う行為は、私の世界を広げたのではないだろうか、私の生活を豊かにしたのではないだろうかと気づいたとき、罪悪感から一転、メディア体験を肯定する視点を得ました。テレビというメディアについてもっと考えたいと思い、博士課程では表象・メディア論コースに移動し、現在に至ります。」

学生：「ありがとうございます。では、次に先生が影響を受けた本についてお願いします。」

太田先生：「高橋竹山の『津軽三味線ひとり旅』が琴線に触れました。彼は幼少期にほぼ失明し、三味線を弾いて各地を回ることで暮らしを立てていた人です。壮絶な人生が津軽弁で記されています。竹山の哀切の音色は、彼の苦労と津軽の風土が相まって生まれたことを知り、故郷の青森についてもっと学びたいと思うようになりました。また、サマセット・モームが好きでよく読んでいました。『ロータス・イーター』は研究の世

界へと背中を押してくれた作品です。」

担当されている授業とその内容

学生：「次に、先生が担当されている授業を教えてください。」

太田先生：「私は人文初年次演習という授業を担当しています。この授業は、人文学部の一年生を対象とし、基本的なアカデミックスキルの習得を目指すものです。簡単な個人研究を通して、引用や参考文献の書き方、発表資料の作り方などを学んでいます。研究への第一歩を踏み出す授業です。」

学生：「授業を行う上で何か意識していることはありますか？」

太田先生：「アカデミックスキルは大学４年間の学びに必要なものなので、ここでつまずかないよう丁寧な指導を心がけています。また、人文学を楽しむ態度を培ってほしいので、学生の発表や発言にはまず私が面白がる姿勢を見せていきたいなと思っています。」

人文初年次演習で学生の発表にコメントする様子

先生の学生生活について

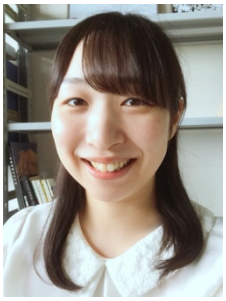
学生：「先生の大学生の頃の生活について教えてください。」

太田先生：「私は旅行が好きでよく外国に行っていました。４年間で１３ヶ国を旅しています。大学に入って初めて留学生の友達ができたので、日本人の友達と一緒に彼女を訪ねて韓国に行ったりしました。印象的だったのは、外務省の青年交流プログラムで中東のアラブ首長国連邦を訪問したことです。現地の女子大生と友達になったり、美しいモスクに行ったり、ラクダの肉など地域の食べ物に挑戦したりと、とても楽しかったです。イスラームへの関心をきっかけに、大学の文化祭では『着て見てイスラーム』という展示に携わりました。政治経済学部の中東研究ゼミが企画したもので、私は学部の友人たちと一緒にお手伝いをし、イスラーム衣装の試着コーナーを担当しました。大学時代の大切な思い出の一つです。」

専門の分野を目指す人へのメッセージ

学生：「では、最後にご専門の分野を目指す人へのメッセージをお願いします。」

太田先生：「例えば、テレビを見て不思議に思ったとか、感動したとか、問いの出発点にあるメディア体験を大切にしてほしいです。見田宗介という社会学者の言葉を借りれば、『自分にとってほんとうに大切な問題に、どこまでも誠実であるという態度』が、自分も他者をも揺り動かす研究につながるのだと思います。そして、可能であればぜひフィールドに出てみてください。現地の人々とお話したり、おいしい食べ物と出会うのは楽しいです。自分が思いつかないような視点を得られるかもしれません。」



太田美奈子（おおた・みなこ）先生
メディア・表現文化プログラム。青森県出身。早稲田大学大学院文学研究科でメディア論を学んだ後、２０１９年、新潟大学人文学部に助教として着任。